

非動作主主語と外項

——「気持ちを和ませる」表現をめぐって——

羽 鳥 百合子*

Non-Agentive Subject and External Argument — On the Expression *Kimoti o Nagomaseru* —

Yuriko HATORI

Abstract

Japanese psychological phrasal expressions represented by *kimoti o nagomaseru* show several interesting properties that require a proper explanation. Hasegawa (2001) takes a purely syntactic approach to account for both the non-agentive status of the subject and the accusative case marking of the object. In contrast, the present paper takes a lexical semantic approach following the analysis given by Kageyama (2002) with respect to what he calls 'non-accusative causative verbs'. It is shown that there are three types of *kimoti o nagomaseru* type expressions which behave differently and that Hasegawa's syntactic approach cannot explain these differences properly.

Key Words: non-agentive subject, external argument, causatives, psychological phrasal expressions, lexical conceptual structure

1. はじめに

動詞の語彙的な情報がどのように統語構造に反映するかという問いに対して、動詞の様々な統語的振る舞いは語彙的な意味構造を豊かにすることで説明できるとする立場と、基本的には統語構造によって説明されるとする立場が相対している。

例えば、Hasegawa (2001) は後者の立場に立ち、(1) (2) のような非動作主を主語とする使役文に対して統語論的な分析を提案している。

*教授 言語学・英語学

- (1) a. The wind opened the door.
b. 渋滞がバスを遅らせた
c. チームの優勝が監督を満足させた
d. John_i hurt his_j knees

(2) 皆が子供達の笑顔に気持ちを和ませた

一方、影山（2002）では、非動作主を主語とする英語の *gush* 動詞や日本語の「生じる」動詞の例を示し、その振る舞いに対して語彙意味論的な分析を提案している。

- (3) a. The volcano gushed hot lava.
b. The burn oozed watery fluid for many days.

(4) a. コンピュータが（その心臓部に）ミスを生じた

b. 木が（その枝先に／から）芽をふいた (影山2002：123)

どちらの論文にも共通しているのは、「外項のない他動詞」の存在を認め、外項をもつ他動詞だけが目的語に対格を付与するという「Burzioの一般化」がそのままでは成り立たないとしている点である。本論文では、まず影山（2002）及び Hasegawa（2001）の論点を各々概観し、次に、Hatori（1997, 1999）で取り上げた（2）の「気持ちをなごませる」型の心理表現の特性をより詳しく調べることによって、このタイプの表現をすべて Hasegawa（2001）の統語構造で一律に扱うのは無理があり、むしろ動詞の語彙的な情報を豊かに用いることができる影山（2002）の語彙意味論的アプローチの方が妥当ではないかと論ずる。

2. 影山（2002）の非対格他動詞と外項

影山（2002：123-129）は、（3）や（4）の他動詞は、いずれも何かがある場所から湧き出すことを意味する湧出動詞であるとし、英語では、上記の *gush*, *ooze* の他に *drip*, *spurt*, *leak* などをこの仲間に入れている。（3）、（4）には、次のような自動詞文が対応する。¹

- (5) a. Hot lava gushed from the volcano.
b. Watery fluid oozed out of the burn for many days
(6) a. コンピュータ（の心臓部）にミスが生じた
b. 木（の枝先に／から）芽がふいた

影山は、これらの動詞が目的語を取るにも関わらず、受身化を許さないということから、外項をもたない他動詞、即ち非対格他動詞であるとしている。

- (7) a. *Hot lava was gushed by the volcano.

b. *コンピュータによってミスが生じられた

影山によれば、これらの湧出動詞が er 名詞を形成できないということも、外項をもたないからだとしている。

(8) *oozer, *dripper, *leaker

これに対して、一見同じように非動作主主語をとる emit や shed のような動詞は、受身が可能であり、また、er 名詞を形成することから外項をもつと考えている。

(9) a. The radiation emitted by the black hole is independent of what goes in.

b. emitter, shedder, radiator

影山は、gush のような非対格他動詞の主語は場所名詞であり、(10 a) のような自動詞の語彙概念構造の場所表現即ち z が主語として取り立てられ、(10 b) のように他動詞化したと考えている。これは、外項となるべき行為者 (actor) や使役者 (causer) とは異なるものである。

(10) a. [BECOME [y BE NOT - AT - z]]

↓ ↓
Oil gushed from the tanker

b. [z_i BECOME [y BE NOT - AT - z_i]]

↓ ↓ ↓
The tanker gushed oil (from several cracks)

なぜ、外項ではない場所主語が目的語に対格を与えるのか、即ちなぜ「Burzio の一般化」に反することができるのか。この問いに対する影山の答えは、「サンドイッチ構造による対格の認可」というものである。(11) のような語彙概念構造において、z_i には含まれていることによって、y に対格が認可されると考えている (影山 2002 : 140)。

(11) [z_i BE / BECOME [y ... z_i]]

3. Hasegawa (2001) の非動作主使役文と外項

Hasegawa (2001) は、「Burzio の一般化」で関係づけられている対格付与と外項の存在とを分けて考えるべきであるとし、外項をもたないにもかかわらず対格を付与することができる非動作主使役文 (Non-Agentive Causatives) を取り上げている。(1) (2) を以下に繰り返す。

(1) a. The wind opened the door.

b. 渋滞がバスを遅らせた

c. チームの優勝が監督を満足させた

d. John_i hurt his_i knees

(2) 皆が子供達の笑顔に気持ちを和ませた

(1) には、各々対応する動作主使役文 (1)'が存在し、この場合の主語は明らかに外項であると見なされる。²

(1)' a. Jane opened the door.

b. 運転手が (のろのろ運転をして) バスを遅らせた

c. 選手が (自主的な練習をして) 監督を満足させた

d. John hurt Bill's knees

一方、(1) (2) の非動作主主語は外項ではなく、VP の内部の Causer 或いは Experiencer に相当すると、Hasegawa は指摘する。(12) (13) に見られるように、対応する自動詞文では、Causer 及び Experiencer はそれぞれ VP 内部の要素として現れる。

(12) a. ?The door opened with a gust of wind. (Hasegawa 2001: 16)

b. バスが渋滞で遅れた

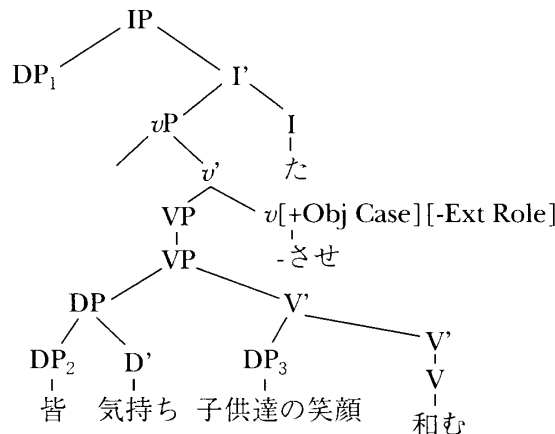
c. 監督がチームの優勝に満足した

d. Bill's knees hurt.

(13) 子供達の笑顔に皆の気持ちが和んだ

従って、例えば (2) に対して、Hasegawa (2001 : 24) は以下のような構造を提案している。

(14)



DP₁ が主格を得る位置だとすると、DP₂ 即ち「皆」が繰り上がった場合にできるのが (15 a), DP₃ 即ち「子供達の笑顔」が繰り上がるのが (15 b) ということになる。

非動作主主語と外項：「気持ちを和ませる」表現をめぐって

(15) a. 皆が子供達の笑顔に気持ちを和ませた

b. 子供達の笑顔が皆の気持ちを和ませた

また、使役のvを取らなければ、次のような自動詞文を生ずることになる。³

(16) a. 子供達の笑顔に皆が気持ちが和んだ

b. 子供達の笑顔に皆の気持ちが和んだ

(16) の構造に、更に受身の「られ」がつくと、(17) のような文が可能である。

(17) a. 皆が子供達の笑顔に気持ちが和ませられた

b. 皆が子供達の笑顔に気持ちを和ませられた

c. 子供達の笑顔に皆の気持ちが和ませられた

「気持ちを和ませる」のような心理表現が Hasegawa の (16) の構造をもつとすると、同じような形式をもつ身体部位を伴う心理表現は、基本的に同じ振る舞いをすることが予想される。即ち上記 (15) の2つのタイプの非動作主使役文、(16) の2つのタイプの自動詞文、(17) の3つのタイプの使役受身文がすべて可能になるはずである。次節では、具体的な例に従って、この点を検証してみよう。

4. 「気持ちを和ませる」表現のなかま

日本語には「気持ちを和ませる」型の身体部位名詞を含む心理表現が多数存在し、やや口語的な文体の中でつかわれるものも多い。以下の例文は、検索エンジン Google によって得たものである。各々の具体的な出典の表記は省略する。

(18) a. 患者さんの多くが、糖尿病に対する世間の無理解に心を痛め、つらい思いを日々体験しているのです。

b. このコンプレックスが正常な母親の心を乱し、必要以上に子供にプレッシャーを掛けてしまうのです。

c. 「ママシ注意」の看板に肝を冷やしながら歩を進めると、かすかに水の流れる音が聞こえてきた。

d. 大手銀行や流通業界、そしてテロ事件と次々に私達の胸を痛める出来事ばかりでした。

e. しつけをされない犬は、リーダーとなって家庭を守ろうとし神経をとがらせます。

f. 鍾乳洞は観光で訪れるほど整備はされてなく、観光で入った人は肝試し程度の感動を覚える処であります。是非ここで背筋を凍らせてください。

- g. 本当に楽しい日でした。夜になってからのパレードのネオンが、私たちの心をはずませ、夢のような思いでした。
- h. さいわいにも当初到着した北九州から西中国一体は、温暖で雨に恵まれてはいたが、毎年のように襲う台風には肝をつぶし収穫を台無しにされて途方に暮れたはずである。

このような身体部位名詞を含む心理表現は、一見同じような働きをしているように思われるが、動詞の形に注目すると、3つのタイプに分けることができる。1つめは、自動詞に-eを加えることによって他動詞化するタイプで(18 a)や(18 d)の「痛める」はその例である。⁴ 2つめは、自動詞に-asをつけることによって他動詞化するもので、非常に多くの動詞がこのタイプに入る。上記(18)の「乱す」「冷やす」「とがらす」「凍らす」「はずませる」がその例になる。3つめとしては、他動詞の方が元になるタイプで、(18 h)の「つぶす」がこれに相当し、-e-接辞付加によって自動詞「つぶれる」が形成される。⁵

以下、更に例を追加して、この種の他動詞表現をタイプ別に分類して列挙する。後続する()内には、対応する自動詞表現を記す。

[I] -e-他動詞表現

心を痛める(心が痛む)、胸を痛める(胸が痛む)、頭を痛める(頭が痛む)、腹を立てる(腹が立つ)、気をゆるめる(気がゆるむ)、心を傾ける(心が傾く)

[II] -as-他動詞表現

心を和ます(心が和む)、気持ちを和ます(気持ちが和む)、気を減入らす(気が減入る)、神経をとがらす(神経がとがる)、背筋を凍らす(背筋が凍る)、血を凍らす(血が凍る)、血を沸き立たせる(血が沸き立つ)、心を乱す(心が乱れる)、心を動かす(心が動く)、胸を膨らます(胸が膨らむ)、心を弾ます(心が弾む)、心を躍らす(心が躍る)、胸を躍らす(胸が躍る)、胸を騒がす(胸が騒ぐ)、肝を冷やす(肝が冷える)、胸をつまらす(胸がつまる)、神経をすり減らす(神経がすり減る)

[III] 元からの他動詞表現

気を抜く(気が抜ける)、肝をつぶす(肝がつぶれる)、心を離す(心が離れる)、気持ちをくじく(気持ちがくじける)

上記[I]～[III]は、いずれも身体部位名詞を「を」格の目的語としてとる使役表現であり、対応する自動詞表現があり、非動作主即ちここでは経験者を主語にとるという共通の特徴を有している。Hasegawa(2001)の立場であれば、(14)の構造を付与されるはずである。しかし、これらの心理表現が、すべて同じ統語的振る舞いをするものではないことを、以下に示す。

第一に、(15) – (17) で見たタイプの構文を一部許さないものがある。ほとんどの表現は、身体部位の所有者が主語位置に上昇する (15 a) のタイプと、身体部位の所有者が元の位置にとどまり、別の主語をもつ (15 b) のタイプの両方の構文を許す。

- (15) a. 皆が子供達の笑顔に気持ちを和ませた
b. 子供達の笑顔が皆の気持ちを和ませた

しかし、これが成立するのは、主として [Ⅱ] に挙げた -as-他動詞表現の場合であり、[Ⅰ] や [Ⅲ] の表現の場合は、語彙的な差が生ずる。

- (19) a. 山田氏が息子の態度に腹を立てた
b. * 息子の態度が山田氏の腹を立てた
c. 息子の態度が山田氏の腹を立てさせた
d. * 山田氏が息子の態度に腹を立てさせた

- (20) a. 先生が裕子のことばに心を傾けた
b. * 裕子のことばが先生の心を傾けた
c. 裕子のことばが先生の心を傾けさせた
d. * 先生が裕子のことばに心を傾けさせた

- (21) a. 飼い主が愛犬の病気に心を痛めた
b. 愛犬の病気が飼い主の心を痛めた
c. 飼い主が愛犬の病気に心を痛ませた
d. 愛犬の病気が飼い主の心を痛ませた
e. 愛犬の病気が飼い主の心を痛めさせた
f. * 飼い主が愛犬の病気に心を痛めさせた

- (22) a. 点差が大きくて選手達がプレーで気を抜いた
b. * 大きな点差が選手達の気を抜いた

上記の例が示すように、「他人の腹を立て」たり、「他人の心を傾ける」ことはできない。その替りに、「腹を立てさせる」や「心を傾けさせる」という形がある。しかし、この表現は逆に所有者が主語位置に上昇する形ではつかえない。即ち「自分の腹を立てさせる」ことはできない。また、「痛める」については、更に「痛ませる」「痛めさせる」という2つの使役形が存在し、(15 a) タイプの用法は「痛めさせる」には許されないが、(15 b) タイプの用法はすべての使役形において可能だということが分かる。⁶ また、「気を抜く」は、原因＝使役者を主語とする心理表現ではないことを (24 b) が示している。

次に (17) の受身形の可能性について検討してみよう。これも、[Ⅱ] の -as-他動詞表現に

については、基本的にはすべて受身形が可能であると思われる。Google 検索で得た例を挙げてみる。

- (23) a. この部分を読んだときに、私は・・・漱石のアイスピックのように鋭いセンスに背筋を凍らされた。
b. 展開される復讐劇には背筋が凍らされる。
c. 後半10分すぎ、浦和のFWトゥットの右ポスト直撃のシュートに肝を冷やされながら、何とかしのいで…
d. それにしても今回の小説の“犯人”には、肝が冷やされた。

上記の受身の例では、「背筋」及び「肝」は「を」「が」いずれの格標示も許すことに注意する必要がある。

[Ⅲ] の表現に対しても、受身形は可能である。例文は多くないが「を」のかわりに「が」で標示される例文も検索された。

- (24) a. 同じように車で右折しようと待っていて、信号が変わったので出ようとしたら、突っ込んで来た対向車に完全に肝をつぶされた。
b. そこである人の提案で爆竹を慣らし、そのすごい音で「年」を驚かしたら、結局「年」の肝がつぶされ、天界に逃げました。
c. 気を抜いたらダメだと分かっているのに、ふとした瞬間に気が抜かれてしまう。
d. 私は必死でその時代のむごさや悲しさを語ったのにその後で気が抜かれるようでした。
e. セールの機会に、とでかけたデパートでしたがあまりの混雑に気持ちをくじかれ売り場を後にした。
f. この雨じゃ仕方がないけれど、今日にむけて盛り上げてきた子ども達の気持ちがくじかれてしまって残念。

これに対して、[I] 型の表現の場合は、そのままの形では受身を許さない。(19) - (21) で見たように、これらは他動詞形に更に「させ」がついた使役形を許し、この「させ」形にのみ受身が許される。

- (25) a. * 私達は生徒の訴えに心が／を痛められた
b. 私達は生徒の訴えに心を痛めさせられた
(26) a. * 若者たちの横柄な態度に参加者は腹が／を立てられた
b. 若者たちの横柄な態度に参加者は腹を立てさせられた
(27) a. * ノルマのプレッシャーがなくなり、従業員達は気が／をゆるめられた

- b. ノルマのプレッシャーがなくなり、従業員達は気をゆるませられた

これらの動詞自体が受身を許さないわけではないことは次の (28) – (30) の例のように、心理表現とは関係ない構文で、受身が可能なことを見れば明らかである。

- (28) a. シカに木を痛められ、立ち枯れする植林が出てきた
b. 植林の木がシカに痛められている
- (29) a. 妙な看板を立てられた田んぼの地主が困惑しているらしい
b. 田んぼに妙な看板が立てられた
- (30) a. 引いてばかりいたら、相手にロープをゆるめられ、バランスを崩した
b. 突然にロープがゆるめられた

以上本節で指摘したことをまとめると、いわゆる身体部位名詞を目的語にとるような心理表現は、その動詞の語彙的な特性に従って、3つのグループに分かれる。圧倒的に多いのは、[Ⅱ]の-as(os)-接辞による他動詞化を受けたものであり、その統語的な振る舞い方にも一般性がみられる。これに対して、[Ⅰ][Ⅲ]のグループに属するものは、数も少なく、かつ語彙的な制約が強いと思われる。特に[Ⅰ]の-e-接辞によって他動詞化したものは、受身を許さず、それぞれの語彙固有の特性を示す。また、これらの他動詞は更に「させ」をつけた使役形を生み出す方向に拡張が進んでいることが分かる。

5. 語彙意味論的分析

Hasegawa (2001 : 24) では、v[+Obj Case][-Ext. Role] に相当するものとして-e 及び-(s)ase の両方の接辞を同じように扱っているが、前節では、それが必ずしも妥当な方向とは言えないことを示した。影山 (1996 : 195–97) は、「濡らす」「枯らす」「揺らす」「起こす」などの-as(os)-他動詞と「建てる」「並べる」「沈める」などの-e-他動詞の意味的な違いに注目し、前者はいわゆる使役であり、CAUSE という意味述語を導入するのに対して、後者は主語が直接的に事態発生をコントロールしており、異なった語彙的意味構造をもつとしている。⁷

- (31) a. {彼は／雨が} 傘を濡らした
b. {大工さんが／*彼の持ち家願望が} 家を建てた (影山 1996 : 196)

前節で指摘した-as(os)-他動詞表現と-e-他動詞表現の異なった特徴は、影山の語彙意味論的アプローチを支持するものではないかと考える。

そこで、本論文で考察した感情表現のうち [Ⅱ] と [Ⅲ] に対しては、CAUSE を導入した下記の構造を仮定する。

- (32) a. $[y_i \text{ CAUSE } [\text{BECOME } [[z \text{ OF-}y_i] \text{ BE STATE AT-}x]]]$
↓ ↓ ↓ ↓ ↓
皆 気持ち 皆 和んでいる 子供達の
状態 笑顔
- b. $[x \text{ CAUSE } [\text{BECOME } [[z \text{ OF-}y] \text{ BE STATE}]]]$
↓ ↓ ↓ ↓ ↓
子供達の笑顔 気持ち 皆 和んでいる状態

(32 ab) はそれぞれ (15 ab) と対応する。主語は CAUSE の項であり、いずれも外項とみなすことができ、目的語が「を」格を取ることは、特に問題ないことになる。

(15) a. 皆が子供達の笑顔に気持ちを和ませた

b. 子供達の笑顔が皆の気持ちを和ませた

これに対して (19) に見られるような [I] のタイプの表現にはどのような構造を与えるべきであろうか。

(19) a. 山田氏が息子の態度に腹を立てた

b. *息子の態度が山田氏の腹を立てた

c. 息子の態度が山田氏の腹を立てさせた

d. *山田氏が息子の態度に腹を立てさせた

ここでは、(19 a) は次のような構造をもつと考えたい。

- (33) $[y_i [\text{BECOME } [[z \text{ OF-}y_i] \text{ BE STATE AT-}x]]]$
↓ ↓ ↓ ↓ ↓
山田氏 腹 山田氏 立っている状態 息子の態度
(=怒っている)

この構造は、2節で見た影山 (2002) の非対格他動詞の構造 (10 b) と類似した形をしている。これは外項をもたない構造である。(10 b) と同様に、この構造は (11) のサンドイッチ構造をなしていると見なすことができ、そのため z (= 身体名称) に「を」格が付与されると考えられるのではないか。確かに (10 b) と (33) とでは多少意味構造が異なるが、注目すべき共通点は、サンドイッチの右に出てくる項がいずれも付加詞の位置にあるという点である。即ち本来の外項ではない上位項に対格付与力を与えるためには、付加詞の位置にあるものが力を貸すことが必要だという影山の直観は、妥当なものとして支持できるのではないか。(33) が外項をもたないのであれば、[I] の表現が受身を許さないことは説明される。また、(33) は CAUSE を含まないため、(19 b) の非文法性も説明される。(33) に CAUSE を加え (32 b) の

ような構造を作ると、これに対応する文は (19c) となり、この構造は外項をもつために、受身が可能であるという説明ができる。

(34) 山田氏が息子の態度に腹を立てさせられた

以上、「気持ちを和ませる」に対しては (32)、「腹を立てる」に対しては (33) という異なった語彙的意味構造を提案したが、圧倒的多数の表現が CAUSE をもつ (32) であるということは無視できない事実である。実際、-e-他動詞の振る舞いは一様ではない。例えば、「痛める」は「心を痛める」「胸を痛める」「頭を痛める」などの複数の表現に現れ、その振る舞いは「腹を立てる」に比べて語彙的な制約が弱いように思われる。「他人の腹を立てる」ことはできないが、「他人の心や胸を痛める」という言い方は、検索で出てくる。

(35) 愛犬の病気ほど、飼い主の心を痛めるものは無い。

更に、より多くの例が「痛ませる」「痛めさせる」と、-as-使役形の方に移行しているという事実が、(32) が安定した無標の構造であり、(33) は有標の不安定な構造であるということを示しているのではないだろうか。

6. 結 び

本論文では、Hatori (1997, 1999) で言及し、Hasegawa (2001) が具体的な分析を示した「気持ちを和ませる」型の表現を検討し直し、すべての表現がみな同じ統語的特性を示すわけではないことを指摘し、少なくとも2種類の異なった語彙的意味構造が与えられるべきであるという提案をした。そのうちで語彙的な制約が強く見られる-e-他動詞を含む表現については影山 (2002) の非対格他動詞として分析し、外項をもたないにも関わらず「を」格が与えられる構造とみなした。

しかし、圧倒的多数のこの種の感情表現は、-as(os)-他動詞、または元からの他動詞を含むものであり、従って、CAUSE をもつ使役構造を与え、使役者を外項として分析した。この点では、「気持ちを和ませる」の使役者主語を外項とはみなさない Hasegawa (2001) とは異なる立場を取る。Hasegawa は、外項を意図性をもつ行為者と同一視しているように思われるが、本論文では外項は意図性とは切り離し、意図性をもたない無生物の使役者や影響の受け手である経験者も行為者と同じように外項となると考えたい。実際、「気持ちを和ませる」型表現の主語は意図性があると見なせる場合も、見なせない場合もあり、その境界は必ずしも明確ではない。(18f) の例に見られるように、日本語では、実際に意図的にコントロールできない感情に対しても、あたかもコントロールが可能であるような言い方が可能である。

(18f) 鍾乳洞は観光で訪れるほど整備はされてなく、観光で入った人は肝試し程度の感動を覚える処であります。是非ここで背筋を凍らせてください。

これは、例えば次のような英語の表現が意図性をもつ場合ともたない場合の両方の解釈が与えられるのと同じであろう。

(36) John hurt his friend.

この場合 John は意図性の有無に関係なく外項であるとみなすのが妥当である。

注

1. 以下の (5) – (9) の例文は、いずれも影山 (2002) で用いられていたものである。
2. ここで、Hasegawa が Agentive と考えているものは、実際には「意図性をもつもの」とほとんど同一視できる。
3. 例文は、かき混ぜ規則を適用して、なるべく自然な語順のものにする。
4. 類似した意味をもつ表現に「心を傷つける」があるが、これは自分に対してはほとんど用いられないという点で、「心を痛める」とは用法が異なる。
5. 影山 (1996 : 183–184) では、他動詞に *-e* をつけて自動詞に転換する動詞の例が多数挙げられている。
6. 筆者自身は、「心を痛ませる」という動詞の形には抵抗があり、自分では用いないが、実際に Google 検索で得たデータの中には、ある程度の数の用例が見つかった。
7. 影山 (1996) では、CAUSE とは別に CONTROL という概念を用いているが、本論文では特に CONTROL を導入することはしない。

参考文献

- Hasegawa, Nobuko (2001) “Causatives and the Role of *v*: Agent, Causer, and Experiencer,” In *Linguistics and Interdisciplinary Research — Proceedings of the COE International Symposium*, ed. Kazuko Inoue and Nobuko Hasegawa, 1–35.
- Hatori, Yuriko (1997) “On the Lexical Conceptual Structure of Psych-Verbs,” In *Verb Semantics and Syntactic Structure*, ed. Taro Kageyama, Kurosio Publishers, 15–44.
- Hatori, Yuriko (1999) “Psychological Verbs in Reflexive Construction,” In *Linguistics: In Search of the Human Mind*, ed. Masatake Muraki and Enoch Iwamoto, Kaitakusha, 209–235.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版。
- 影山太郎 (2002) 「非対格構造の他動詞」『文法理論：レキシコンと統語』伊藤たかね (編) 東京大学出版会, 119–145.